

## 損傷許容の美意識

陶芸を趣味としている。自宅を建てる時に、別棟に窯屋を作りガス窯を設置した。通常は居間を作る南側の部屋を土間として、作業場にした。粘土をこねて轆轤を回していると、無条件に楽しい。粘土自身がなりたい形を指先に感じる事があって、そのときは浮世のことを全て忘れている。親子3代全員が好きなので、何気兼ねなく陶芸をすることができる。窯焚きは、僅かな隙間から見える窯の中の色と、煙の様子、それに温度計の指示を見て、焼結の様子を想像し、ガス量と空気量を調整していく。僅かなシグナルから見えない窯の中の様子を知る、なんだか非破壊検査の手法にも似ているが、やっているときには、そんなことは露ほども考えない。わが作品は国宝級の名品として完成に向けて、着々と焼結していつているはずである。火を止めて窯の口を開けるまで約 24 時間を要するが、その間は、年末ジャンボを購入してから 12 月 31 日までの間に似ている。火を止めて窯の口を開けると、現実に引き戻される。出来が悪ければ悪いほどいとおしさを感じるのは、どうしてだろうと思うが、気持ちは一気に天才陶芸家からできの悪い子を持った親心に切り替わる。

窯から作品を出して、鑑賞と反省のひと時をすこす。疲れてうとうととしていると、“チン”という微かな音が聞こえてくる。断続的に、間延びした雨音のようなリズムで鳴る微かな音が、居眠りにとても心地よい。この音の正体は、貫入が入る音である。貫入は、釉薬と陶器本体の収縮率の相違によって上薬がわに発生するクラックである。中国の陶器は、“玉”の代用として作られたため、形はシンメトリーで、ほんのちょっとした傷も無いものが良品とされてきた。わが国の陶器を巡る美意識の中には、アンシンメトリーで傷を内包しているものを美しいと見る見方がある。安土桃山の“わびさび”はもとより、ずっとさかのぼって、縄文土器の力強さの中には、おおらかな美意識がある。貫入も、きずではなく一つの模様として楽しもうという美意識が定着している。

“チン”となるごとに、“アコースティックエミッションだよな”とか“貫入の模様を観察すれば、クラックの入った順番を教える教材になるよな”とかとか俗世のことが頭をよぎってくる。趣味の世界で仕事のことを考えるのは、愚の骨頂。1 / f の揺らぎのなかで、意識を漂わせるのがよい。それにしても、とまた浮世の意識。材料や部材にきずがあることを前提にして、破壊力学と非破壊検査を有力な手段として登場した「損傷許容設計」思想、損傷許容の美意識を生き育ててきた日本でこそ大きく育っても不思議ではないよなあ……。と、そこへどこからともなく聞こえる声。“お父さん、いつまでそこでうたた寝をしているの！”愛妻の一喝で我に帰り、明日の仕事のために寢床につくのでした。